

Rappaccini's Garden に漂う孤独

鶴 木 奎 治 郎

- I Beatrice と Giovanni の植物への変貌とその孤独
 - (A) What is Beatrice? と尋ねる事の困難さ
 - (B) 美にして醜なる Beatrice の Ambivalence
 - (C) 植物の Imagery
 - その 1 hybrid を生み出す為の条件
 - その 2 特に植物の hybrid が必要とされる意味
 - その 3 hybrid の倫理的な意味
 - その 4 hybrid の孤独性の文学的意味
- II Rappaccini と Baglioni の科学への傾倒とその孤独
 - (A) 父親としての Rappaccini
 - (B) 母親としての Baglioni
 - (C) 科学者の孤独性の文学的意味

I Beatrice と Giovanni の植物への変貌とその孤独

(A) What is Beatrice? と尋ねる事の困難さ

この作品程多くの批評がなされてきたものはないが、その論点の多くは、Beatrice の本質規定の困難さのただ一点に集中している。父親 Rappaccini の被験者となって、毒草をとり扱っている内に次第に彼女の体は毒が充満していった。第一の問題は彼女の魂が、その毒に汚された肉体と如何なる関係にあったかにある。Martin, Crews など多くの批評家は、彼女の魂は肉体の墮落と関係なく彼女の魂の純粹さは保たれたとみているし、Fogle は Beatrice を地上の人間して見る時には魂と肉体との相関を認めながらも、結局死をもって Beatrice がその肉体の evil を購った時には魂は純化されていたと見る。Who is Beatrice? という標題で、大上段からこの問題に取り組んだ Tharpe にしても、Beatrice を ordinary experience の中に於て諒解しようとした Giovanni と、Beatrice の ordinary nature のみを捕捉しようとした Baglioni は結局 Beatrice の本質の一部分しか捕える事ができなかったとしている。即ち、Beatrice はその父親 Rappaccini と同じく軽々しく ordinary な本質規定を与える事を許さない特殊な人間 eccentric なのである。この意味に於て Tharpe が云うように、Beatrice の正体は死に於てすら不明であったというのは正鵠を得ているといわねばならない。確かに彼女の精神と肉体の二元性及びその相関という問題がたえず重大な Cartesian Aporie として我々にその解決を追ってくる事は事実なのであるが、さりとて我々がこの二元性をはっきりと意識して、Beatrice の魂は汚れた肉体に災されて不純になっていたと見ようとすればそれも可能であるように思われ、逆に魂の独立性・純粹性を指摘しようとすればそれも又可能であるように思われる。もし我々が Beatrice の本質規定を与える事ができるとすれば、肉体と魂が常に一体となって生きていた時の Beatrice の実存的存在様式を、あるがままに現象として捕えるより他に途はないのではないかと思われるし、

又そのような複雑さの為に醸しだされる読者の側の怪しい狐疑逡巡と緊張こそ、いくらか 'oriental sunshine of her beauty' とでも称すべき Beatrice の 'voluptuous beauty' を読者に理解させる為の芸術家 Hawthorne の意図だったのではなかろうかとも思われる⁽⁷⁾。

現象学的にみようとすると、この作品を allegory とみるか symbol とみるかの問題が起る。作品の具体的主題が明確であれば我々は allegory 説をとる事ができるし、象徴的事件が推定できれば我々は symbol 説をとる事ができる。然し、この作品に於ては、主題は不明瞭であり、従って技法も allegory と symbol が交錯している。まさに、現象的には Beatrice の恋人役として登場する Giovanni が、この Beatrice という女性が fantasy の所産なのかそれとも現実の女性なのかと悩んでいるように、その Giovanni と同じ悩みを我々は味わう事になるのである。というのは、主としてこの作品は Giovanni の体験という視点を通じて話が展開していくからである。従って、我々は全く確実と思われる imagery から出発しなくては徒に問題を紛糾させる結果を招来するのみとなろう。

(B) 美にして醜なる Beatrice の Ambivalence

その確実な imagery の中で最も確からしいものは、Beatrice が徹頭徹尾植物との類縁関係に於て語られているという事である。そしてその植物性とは、一般人にとっては有毒な植物という意味であり、Beatrice は作品の冒頭に於て有毒な植物と同一であるという象徴性をおびて登場する。そこで、この作品と *The Birthmark* を比較した Rosenberry の言葉を想起しよう。彼によると、'There, too, the tale (= *The Birthmark*) is wholly concerned with the scientist's operations upon the girl to change her nature, and when the change is complete the tale is done. In this sense, "*Rappaccini's Daughter*" takes up where "*The Birthmark*" leaves off. The crucial change in the girl's nature is quite complete before the story begins' というのである。*The Birthmark* に於ける⁽⁸⁾ Georgiana の頬に示される人間の原罪性又は fragility を象徴する birthmark が消失した時、Georgiana は死に、その実験を試みた夫の Aylmer は忙然自失して立ち疎むのみであった。然し、この作品に於ては神に挑戦した科学者 Rappaccini の実験は物語の発端部に於て既に完全に成功し、被験者である娘 Beatrice は死んでいない。Aylmer は Georgiana の完全な美を実現しようとし、Rappaccini は Beatrice の完全な力を(美と相関関係にあるところの)実現しようとしたのであり、つまり両者共に求めた理想は女性の完全性であった事を考えると、Rosenberry の指摘の正しさが首肯できる。たゞ、Beatrice は、⁽⁹⁾ Georgiana に課せられた実験が既に成功している女性として、その意味では原罪性を放棄した女性として最初から登場しているのであるから、一般人 Georgiana にない力を最初から持っているのである。この力自体は、Georgiana に於て下された神の処罰を免れえている力なのであるから、それ自体邪悪な力である。だから、Beatrice から腕を握られた Giovanni はその部分に痛みを覚える。(he became sensible of a burning and tingling agony in his hand—in his right hand—the very hand which Beatrice had grasped in her own) つまり、innocent にして且つ poisoned であった受身の Georgiana の性格は、poisoner である Beatrice の積極的な性格へと変っているのである。

この poisoner という性格は、どのように Beatrice について好意的にみようとすると、感性的な悪である事は否定できない。Beatrice の spirit を象徴するものは泉の水であるが、この泉を形作る大理石の design が原形をとどめぬ程に壊れていたというのも又象徴的

ではなかろうか。(there was the ruin of a marble fountain in the center, sculptured with rare art, but so woefully shattered that it was impossible to trace the original design from the chaos of remaining fragments.) 即ちたとえ、Beatrice の spirit は肉体によって汚されていないにしても、その spirit を規正する日常経験の枠組みで捉えられる意識は解体し、彼女にあったのは意志とは無関係な自律神経のみであったのではなかろうか。その為に彼女は 'redundant with life, health, and energy' の状態にあったのではなかろうか。さて、意志とは無関係な自律神経の持主として把握すれば、我々は容易に彼女を植物の imagery として理解する事ができる。即ち Boewe の指摘する通り、彼女と庭園に君臨する 'purple blossomed shrub' は同義語であり、父 Rappaccini があえて避けた毒草を姉妹と呼び掛けてその毒の花の匂いを嗅ぎ⁽¹⁰⁾ ("Yes, my sister, my splendor, it shall be Beatrice's task to nurse and serve thee; and thou shalt reward her with thy kisses and perfumed breath, which to her is as the breath of life.") 毒の草を抱き締めては花と髪の毛を交錯させて恍惚境に浸る (Approaching the shrub, she threw open her arms, as with a passionate ardor, and drew its branches into an intimate embrace —so intimate that her features were hidden in its leafy bosom and her glistening ringlets all intermingled with flowers.) のである。この 'Eden of poisonous flowers' の悪と、彼女の肉体の悪は同義語であり、之等の毒草は美麗であると同時に、悪なのである。従って我々は、彼女の魂がもし善であるとすれば、彼女は美なる魂と他人に害を与える醜なる肉体の二元性として捉える事ができる。何れにしても善と悪或いは美と醜が Beatrice にあっては離れ難い ambivalence として結合しているのであり、romanticism 的な美と善の同一性は打破されているといわねばならぬ。

然し美にして醜なる imagery を生む為には何故植物の imagery でなければならないのだろうか。動物の imagery では不都合なのだろうか。私はその理由を次の様に推理してみたい。

(C) 植物の Imagery

—その1— hybrid を生み出す為の条件

この作品の設定は Fogle の持摘するように Gothic Romance の伝統をつぐものとして、密室で行われる実験でなければならなかった。更に私は次の様に追加したい。第一に Rappaccini の実験の為には娘 Beatrice を隔離⁽¹¹⁾しておく事が絶対に必要だったのである。その為には静止的な植物の方が行動的な動物より純粋培養の為には遙かに好都合である。動物なら、折角設定した密室である Rappaccini's garden を何時ぬけだされるか判らないからであり、ぬけだされては、彼女は日常経験を行使できる一般社会と交る事が出来て、その純粋性を保てなくなるからである。Rappaccini の目的は、私のみるところでは単に娘 Beatrice を有毒の性質になさしめて人に怖れられる存在とするだけでなく、Beatrice の女性としての本質を利用して Beatrice 的な hybrid を作ろうとしていたのであるが、hybrid を作る為には、極めて純粋な被験者を材料とするのでなければ、実験の意味がないからである。

—その2— 特に植物の hybrid が必要とされる意味

そこで第二に Boewe の指摘するところであるが、動物よりも植物の方が雑種 hybrid を作るのに好都合である事が認められなければならない。⁽¹²⁾その為にはもう人—男性の役割をは

たしうる Beatrice と同種の純粋種を作らねばならないであろう。物語の終末の破局寸前に於て、青年 Giovanni を前にした Beatrice に対して Rappaccini は次の様に云う。“Pluck one of those precious gems from thy sister shrub and bid thy bridegroom wear it in his bosom. It will not harm him now. Pass on, then, through the world, most dear to one another and dreadful to all besides!” 即ち、このような意図で計画的に改造された Giovanni なる男性と結婚させるのが目的だったのである。この作品に於てはふれられていないが、結婚させる以上、子孫を、つまり Beatrice と Giovanni と同じ性質の、肉体的には毒草と同じ性格をもった子孫を地球上に跋扈させるつもりだったのでなかろうか。まさに Crews のいうように、Rappaccini 自身の抑圧された sexuality の remedy として作品中に登場してこない彼自身の結婚生活の代償として、この二人の結婚が父性愛的 category に於て意図されていたといえよう。いやもっと Crews のいう意味を拡大すれば、Rappaccini は Fogle のいう偽似の神として人間にできる限りの力で Adam と Eve を創造しようとしたのであると考えなければならない。この Giovanni と Beatrice の組合せによって同種の怪物が地球上に蔓延する事を Rappaccini は願ったのである。Fogle によればこの間の事情は次の様に指摘されている。

‘To some extent he governs the world of the story like a god and determines the action until the final catastrophe, when his plans are shattered. The Eden theme is continually suggested in the story, and in a tableau toward the end there is a parody of God in the Garden blessing the newly-created Adam and Eve :’

ところで毒によって Beatrice の体質が変ったとすれば、いわば人間としての本来の Beatrice とは異なる別な動物となったのである。異種間の動物の hybrid は異種間の植物の hybrid 形成よりもその誕生が困難であり、たとえできたにしても生殖能力を失っている場合が多い。Beatrice と同一視される purple blossom を Hawthorne は強調し、且つ花が植物の生殖器官である事を考える時、Boewe の云う ‘symbolic sexual frower’ の意味が諒解できるのではなかろうか。即ち、Baglioni と Giovanni の子孫をこの世に蔓延せしめる為には両者は絶対に植物でなければならなかったのである。且つたとえ Beatrice の精神が純粋であったと仮定したにしても、私が既に述べたように自律神経の支配する肉体となって、精神の balance を欠いていた彼女としては、sexuality の symbol である花と同一視されなければならなかった。我々は植物であるが故に、この不吉な紫の花を現象的には美であると諒解できるが、彼女が動物と identify されていたら、その sexuality は何であろうか。植物の花に相同する動物の器官を考える時、我々はその醜さに慄然とせざるをえず、ここにも技巧家 Hawthorne の巧智が伺える。

—その3— hybrid の倫理的な意味

第三には以上の hybrid という symbol に対して Hawthorne はどのような価値評価を行っているかをみなければならぬ。もし、このような hybrid を作るのが目的であるとする、自分と同種の種族と交わらなければ自己自身も破滅するのだから、あれ程執拗に Beatrice が Giovanni の愛を求めた事の意味が判る。しかし hybrid そのものについては決して Hawthorne は肯定的でないように思われる。つまり ‘adultery, of various vegetable species, that the production was no longer of God’s making, but the monstrous offspring of man’s depraved fancy’ とはっきり断定しているのである。だから、この作

品の catastrophe に於て、もし Giovanni も Beatrice と同じ精神の純粹さを示し、二人の愛が完成していたにしても、その愛は hybrid の愛として Hawthorne の承認するところではないのである。ここにこの作品の困難さがあるといわなければならない。つまり *The Birthmark* に於ては Aylmer が神に挑戦しなければ、Georgiana と Aylmer は神に祝福された幸福な生活を送る事ができたであろうと否定の形でその逆説の静謐さを考える事ができた。ところが、この作品に於ては、もし Giovanni の愛が誠実なものであるとしても、従って Beatrice と Giovanni は結ばれたにしても、Beatrice と Giovanni は神に祝福された幸福な生活を送る事ができたとは、上述の Hawthorne の hybrid 否定の意図よりして到底考える事ができないのである。

更にもう一つ Hawthorne の hybrid 否定の意図を指摘したい。私は先に純粹な hybrid を作る為には、生物学的にみてその素材となる男女が極めて純粹でなければならない事を指摘した。Beatrice 自身はその先天的性格は二元的構造を持ちながらも、彼女自身の表現形式は極めて単純であり素直である事は、彼女に接した Giovanni の次の驚きによって十分伺われる。‘Her face being now more revealed than on the former occasion, he was struck by its expression of simplicity and sweetness.’ 一方之をうけてたつ Giovanni の感受性は Hawthorne によれば次のように極めて詳細に、即ち意図的に不愉快な hybrid として表現されている。‘It was not love, although her rich beauty was a madness to him; nor horror, even while he fancied her spirit to be imbued with the same baneful essence that seemed to prevade her physical frame; but a wild offspring of both love and horror that had each parent in it, and burned like one and shivered like the other. Giovanni knew not what to dread; still less did he know what to hope; yet hope and dread kept a continual warfare in his breast, alternately vanquishing to one another and starting up afresh to renew the contest. Blessed are all simple emotions, be they dark or bright! It is the lurid intermixture of the two that produces the illuminating blaze of the infernal regions.’ 即ち、Hawthorne の云わんとする事は、氣質的に両者が異っていたという事である。だが、肉体の次元に於て見るなら決して両者はその位相を異にしていない。父親 Rappaccini ですら、ふれる事を敢てなしえなかった毒の花に、毒の草に、実に易々として Giovanni は接近していったではないか。例えば Rappaccini にあっては ‘he avoided their actual touch or the direct inhaling of their ordors with a caution that impressed Giovanni most disagreeably’ とその態度に恐怖じみた毒の草花への隔絶した態度が見られるのであるが、Giovanni にあってはそれ程切実な恐怖を湛えているとは思われない。むしろ甘い陶醉というものさえ伺われる。そして終局に於て遂に彼 Giovanni は、自己のはく息で昆虫が死ぬ事を知り、自己の体質が Beatrice の体質と全く同質のものに変貌している事を覚るのである。あれ程、毒の草花の世話をしていた Rappaccini が、又おそらく娘 Beatrice とともに Giovanni 以上に親しかったであろうと思われる Rappaccini が娘の毒に感染せず、Giovanni だけが Beatrice との僅かな接触によって一人毒に感染したというのは不思議な事ではなからうか。Crews はこのようにして Giovanni と Beatrice が同じ体質となつた事情を ‘The situation is metaphorically an Oedipal one,’ と片付けているが、Oedipal one なら両親と子供の近親相姦が問題になる筈であり、Crews が Hawthorne よりその証拠として

引用している 'like playmates from early infancy' では兄妹間の、或は姉弟間の近親相姦が指摘されるにすぎない。この意図は Hawthorne が 'he should be conversing with Beatrice like a brother' という時に、あまりにもはっきりとしていると云わなければならない。このようにして、精神的に異質で肉体的に同質なる二人の男女が hybrid を生み出す事を要請されているのである。兄妹又は姉弟間の hybrid は、両親と子供との間の hybrid より、遺伝的にみて同質であるだけに—そう倫理的には背徳の行為である。このようにして問題はいやが上にも複雑な様相をおびてくる。

—その4— hybrid の孤独性の文学的意味

第四に、このような hybrid ができたにしても、はたして Beatrice と Giovanni が第二の Eve と Adam として陸続と子孫を生みだしていく事ができたであろうか。この hybrid の意味するものは何であろうか。我々は憶測を避けねばならぬ。Beatrice と Giovanni は実際結ばれなかったのだから、もし結ばれたらという仮定を設定する事自体無意味である。たゞ、彼等の破局直前の、お互いに偽善性をかなぐり捨てた地平に於ける相互の対話は、対話というより闘争といった方がふさわしい程に熾烈を極め、しかもその結果両者の懸隔はますます深まる。彼等は、各々単独者として限りなく孤独であり、又一組の恋人同志としても限りなく孤独である。Beatrice に騙されたと信じこんでしまった Giovanni の Beatrice を糾弾する言葉は苛酷な程に真実である。'Now, if our breath be happily as fatal to all others, let us join our lips in one kiss of unutterable hatred, and so die!' この言葉を Beatrice の心情性のみにて理解するなら、我々は Giovanni の非情さを責めるのに躊躇しない。然しもし優柔不断の人 Giovanni の云ったこの言葉の意味を我々が文字通りに把握するならば、そして Giovanni がもしこの言葉通りに実行しようとする意図があるのならば、世界に我々 monsters の子孫が跋扈する事を防ぐ為に、我々は死なねばならないとしているのであり、その意図は Rappaccini に似て孤高なのであるまいか。一方、Beatrice はこの未知の世界からの旅人 Giovanni 即ち 'a voyager from the civilized world'⁽¹⁷⁾ を迎える以前は父親 Rappaccini の狡智によって毒の庭に隔離されていたのであり、その孤独が彼女に傲慢な態度をとらせていたのである。その事を Hawthorne は 'and responded to his gaze of uneasy suspicion with a queenlike haughtiness.' と表現している。そして彼女は自信慢々で、Beatrice の実体に疑念を持っている Giovanni に対し 'Believe nothing of me save what you see with your own eyes.' と云ったかと思うと、その舌の根も乾かぬ中に 'If true to the outward senses, still it may be false in its essence; but the words of Beatrice Rappaccini's lips are true from the depth of the heart outward. Those you may believe.' と矛盾した事を平気で云うのである。そこには、このような表現の矛盾を超越した自己の優越性、自己同一性を主張しているとみてよい。

ところがこの傲慢は、その中間段階に於ては 'She was now the beautiful and unsophisticated girl' と変貌し、はては終局に於て Giovanni の罵倒に接し、次のように哀切を極めた本心の露呈となって終る。

'It is my father's fatal science! No, no, Giovanni; it was not I! Never! Never! I dreamed only to love thee and be with thee a little time, and so let thee pass away, leaving but thine image in mine heart;' この中に私の感じるものは Giovanni にまさる孤独感である。男性である Giovanni のように、社会の目を意識していない Beatrice の孤独感

は 'craves love as its daily food' とたゞその愛の名に於てのみ語られるが故に一層切実である。Kloekner が 'This isolation leads to love' と定式化したのは正しいが、さりとて彼の云うように 'Hawthorne clearly suggests that love, a love of mutual respect, would have been, if not a solution, at least a melioration of the isolation of Giovanni and Beatrice:' と述べたのは、やや感傷的にすぎるように思われる。この兩者にあっては、愛は melioration⁽²⁰⁾ どころかますますその対立を深めていったのではなからうか。

以上を要約するに当って、単に Beatrice 及び Giovanni との愛の物語としてでなく普遍的な男女の愛の物語としてもう一回再構成してみよう。肉体の完全性を標榜してそれが挫折した *The Birthmark* の中で我々が教えられるのは、我々人間は不完全な肉体を完全にしようと考えてはならないという事ではなからうか。もしそうなら、*The Birthmark* が終わった地平で始まったこの物語は、一応悪しき肉体であれ外見上は完全に美しい肉体をもった男女の魂の葛藤としてとりあげうるのではなからうか。そして人間が完全に相互の魂を愛しあえるという主張に対して、再び Hawthorne は人間の被限定性、有限性をといているのではなからうか。従って完全に愛しうとする主張は、完全な肉体を主張した *The Birthmark* と同じように傲慢な主張なのであり、我々にできるのはたゞ愛の真似事にすぎないのである。創造者を真似た Rappaccini が破綻をきたすとすれば、純粋な愛を傾けつくした Beatrice も又破綻をきたしたのではなからうか。ここで私に想起されるのは Emily Dickinson の次の章句のみである。

'Nor had I time to love; but since
Some industry (*italic mine*) must be,
The little toil of love, I thought,
Was large enough for me.'

(21)

II Rappaccini と Baglioni の科学への傾倒とその孤独

(A) 父親としての Rappaccini

我々は一応 Beatrice と Giovanni の間の愛の物語としてみたのだが、本来自由であるべき愛は実はその背後より操られていたのである。先づ Rappaccini は娘 Beatrice を完全に自己の意志で幸福な人間にしあげる事ができると思いこんでいる。Beatrice も当初は Rappaccini's garden という密室の中で育てられただけで、始めて Giovanni と接する迄は幸福だったのである。然し私が前節で述べたように、Rappaccini の意図は Beatrice の力を偉大にするだけに尽きず、密かに Beatrice のよき配偶者を探していたのだ。Giovanni と Baglioni が二回目にあつて話をかわした時に、次のように密かに Rappaccini は Giovanni を観察するのである。'As he passed, this person exchanged a cold and distant salutation with Baglioni, but fixed his eyes upon Giovanni with an intentness that seemed to bring out whatever was within him worthy of notice.'

その結果、多くの批評の中で大きな役割を与えられていない old Lisabetta が周旋役として登場するのであるが、彼女が 'There is a private entrance into the garden!' と Giovanni を誘う時に、何故特に彼女が秘密の庭への入口を知っているのだろうかという疑問が生じないだろうか。そして 'Many a young man in Padua would give gold to be admitted among those flowers.' と彼女が周旋料を請求する言葉をきけば、彼女は之迄も多くの青年を同じ手段で、この庭園に入れていたのではなからうか——つまり、

Rappaccini その人との間に一種の密約があったのではなからうかと思わざるをえない。もう一つ指摘したい事は、このようにして garden に侵入しえた Giovanni が一体どれ位の確率で Beatrice と邂逅できる機会があったのかという頻度である。この作品の冒頭部で、Rappaccini's garden を見下しうる室内に居を定めた Giovanni に Dame Lisabetta はいろいろと介添え役的な世間話をする。その中で彼女は “*Oftentimes (italic mine) you may see the signor doctor at work, and perchance the signora, his daughter, too, gathering the strange flowers that grow in the garden.*” と云っているのだ。つまり Beatrice の方が庭園にでる機会は遙かに少いのである。それにもかかわらず、Giovanni は庭園に侵入する前にも彼女に一回挨拶を送っているし、侵入後は最後の catastrophe を除いて Rappaccini の姿は見えぬのである。之等は何れも Rappaccini が計画的に、Beatrice と Giovanni の接近を計った proof とみてよいのではなからうか。

之程迄の苦勞を重ねて丹誠した Beatrice から破局に於て ‘My father, wherefore didst thou inflict this miserable doom upon thy child?’ と叫ばれた時に、Rappaccini は全く意味が判らないのだ。Rappaccini が驚いて、‘Wouldst thou, then, have preferred the condition of a weak woman, exposed to all evil and capable of none?’ と反論すると、直ちに悲痛な娘の泣きがはねかえってくる。‘I would fain have been loved, not feared.’ で我々ははっきりと父と娘の、いな男性と女性の価値観の差異を探りうるのである。Baglioni によれば、彼女は既に父親の代行を果たしうる程、父親の科学に精通していたというのだが、そんな事は彼女にとっては第二義的な問題にすぎなかったのだ。いわば Rappaccini は作品に登場していない娘の母親の役割は果たす事ができず、父親の役割のみで、遂に娘の心を諒解する事ができなかったのである。

(B) 母親としての Baglioni

一方的な愛情のおしつけに終った Rappaccini に対して、終始 Giovanni の補佐役を勤める Baglioni の態度はどうであろうか。事件の catastrophe に至る迄 Giovanni と Baglioni は三回邂逅し、Hawthorne はその度毎に巧みに状況を変化して設定している。

第一回目は Giovanni 自身から Baglioni を訪ねていくのである。その時 Giovanni としてはむしろ礼儀だと思って Rappaccini に言及した時に跳ね返ってきたのは、‘I, who know the man well, can answer for its truth — that he cares infinitely more for science than for mankind. His patients are interesting to him only as subjects for some new experiments.’ という辛辣な批評であった。第二回目は途中で邂逅するだけだが、この時は早くも Baglioni の方から Giovanni の胸を捕え、むしろ Giovanni は迷惑げに ‘Yes; I am Giovanni Guasconti. You are professor Pietro Baglioni. Now let me pass.’ と逃げようとする。そしてこの時に、前述したように、Rappaccini がこの場面を通りすぎて、始めて Giovanni に目をつけるのである。之を Baglioni は見逃さない。‘He has seen you! he must have seen you!’ と Baglioni が大急ぎで Giovanni に注意を喚起する時に、はっきりと Rappaccini に対抗して、Giovanni を彼自身の実験道具として利用し、Rappaccini の鼻をあかしてやろうという意図が生まれたのではなからうか。第三回目になると Baglioni の方の意図は明確になる。即ち、彼の方で Giovanni の住居を訪ねるのであるが、この時はもうはっきりと ‘One morning, however, he (= Giovanni) was disagreeably (*italic mine*) surprised by a visit from the professor, whom he had

scarcely thought of for whole weeks, and *willingly* have forgotten still longer.' と Giovanni の反感は剥き出しに表現されている。Baglioni は渋る Giovanni を説得し、fantasy を好む Giovanni に極めて allegorical な story をしてきかせる事によって、解毒剤の入っている little silver vase を手渡すのである。

以上の如く Giovanni に接する Baglioni の態度を Beatrice に接する Rappaccini の態度と比べてみると、非常に女性的であるといえよう。始めから自己の信念を強行して無残に失敗した Rappaccini と比べて、Baglioni の計画は Giovanni と会ってから徐々に醸成されたものである。外見だけみると、Rappaccini の方は 'His face was all overspread with a most sickly and sallow hue,' と陰惨で、Baglioni の方は 'apparently of genial nature, and habits that might almost be called jovial.' と明朗であるが、むしろその手段に於ては Baglioni の方が陰湿といえるのではなかろうか。圧倒的に娘に指令した Rappaccini と異って、conversation に巧みな Baglioni は言葉をつくして Giovanni を懐柔する。Rappaccini は Beatrice の本質を変えようとし、Baglioni は Giovanni の本質を変えるまいとする。現状を維持しようとするのは女性の特質である事を考えると、Baglioni は Giovanni に母親的な接し方をしたと云えよう。勿論、Rappaccini が娘に接した態度とは異っている。第一に Giovanni は Baglioni の実子ではないし、長年にわたる Rappaccini との間の確執がある。だが、之を考慮に入れても Baglioni にとって Giovanni は旧友の息子に当るといふのだから全然愛情が無った（たとえ打算にせよ）とはいきれないと思うのである。

(C) 科学者の孤独性の文学的意味

何れにしても二人の科学者は自己の実験の為に、二人の青年男女の肉体と良心を犠牲にしたのである。この意味に於て、Martin が 'But, from what we see in the tale itself, Baglioni's descriptions fit himself at least as much as they do Rappaccini. Baglioni cares more about vanquishing his rival than he cares for the welfare of Giovanni and Beatrice,' と規定して Rappaccini と Baglioni の同質性を指摘したのは全く正しい。然し Tharpe⁽²²⁾ のいうように Rappaccini は empiricism を標榜する現代の実験科学者で、Baglioni は Aristoteles 的な deduction を生命とする非実験科学者であると云いきってしまふ事はできない。次のように Baglioni が Rappaccini を批評する時には、実験科学⁽²³⁾ に対する態度は極めて academic なものであるといえよう。'That the signor doctor does less mischief than might be expected with such dangerous substances is undeniable. Now and then, it must be owned, he has effected, or seemed to effect, a marvellous cure; but, to tell you my private mind, Signor Giovanni, he should receive little credit for such instances of success, — they being probably the work of chance, — but should be held strictly accountable for his failures, which may justly be considered his own work.'

これに対して Rappaccini は、むしろ在野の科学者であり冒険的である。最後の catastrophe に於て Rappaccini と Baglioni は極めて劇的に登場し、娘の予期せざる死に茫然自失する Rappaccini に対して 'Rappaccini! Rappaccini! and is *this* the upshot of your experiment!' と勝利の声を挙げる Baglioni の登場で終了するのであるが、之でこの二人が極めて意図的にこの実験の結果を見守っていた事がはっきり判る。

作品はここでとぎれるのであるが、この後を推理してみよう。完全を期して失敗した Rappaccini は勿論不幸だったであろう。一方 Baglioni の方は ‘antidote’ が Beatrice を治癒しうると信じこんでいたとすれば、やはり治癒という完全性を期して失敗したという点に於て Rappaccini と同罪であり、彼の最後の非難の声は一体誰に向かって投げかけられたものとなるのだろうか。終末の非難が Rappaccini だけに投げかけられたものと解するなら、我々は Baglioni の antidote が実は Beatrice の死をもたらすのである事をあらかじめ計算されて作られたものであるとみななければならないであろう。結果として死が招来される薬なら、致死量を厳密に測定して投薬すべき antidote と異って、実に容易に投薬できるのではなからうか。たとえば Fogle もこの薬が解毒剤だとばかり信じこんでいるようだが、そして多分その通りであろうけれども、少くとも catastrophe の文脈から追っていけば真に解毒剤だったか、意図された毒剤だったかは判らぬのである。この疑がある為に、即ち、最後の Baglioni の声が彼自身の成功を喜んでいる言葉か、失敗を悲しんでいる言葉か確定できない為に、私は迷うのであり、或いは Fogle のいうように Rappaccini と比べて ‘mediocre’ であったという批評が生まれてくる余地を与えるのであろう。もし Baglioni が Beatrice の死を期待していたとすれば、その結果えた喜びは消極的なものであったろう。何故なら、既に述べたように生きる薬をもるより死ぬ薬をもる事の方が容易であって、その結果死を招来したにしても、果して Rappaccini を上回る自己の科学的認識のせいであるかどうか確認できないからだ。従って何れにしても Baglioni は、この時点に於て或いは Rappaccini 以上の無力感を感じた事であろう。二人の科学者を待っていたものは蕭条たる孤独感だったのである。

かくして我々は前述とよく似た次の様な結論に到達するのではあるまいか。Rappaccini のように積極的に実験をおしすすめるだけでは幸福は訪れない。又、Baglioni のように、——彼が何れの立場をとっていたかは確定できないが——たゞ破壊のみを意図するか或は消極的な他人の実験の監視や追試や改善だけでも又同様に幸福は訪れない。要するに科学に於て徹底して成功する事も、徹底して失敗する事も人間には許されていないという事である。前述で結論した不十分な愛を人間の立場では勢一杯の努力として維持せよという命題を、この節の結論として再び生かすなら、不十分な科学を人間の立場では勢一杯の努力として維持せよという事である。愛と科学を至高の神話として信ずるな——限界を設けよという事である。このように解釈する事が許される時、始めてこの作品の重大な本質をなす Rappaccini’s garden の毒草が実は医薬をめざして作られていた (It is said that he distills these plants into medicines that are as potent as a charm.) という事の意味が判るのではなからうか。

註

- (1) HAWTHORNE, Nathaniel : Rappaccini’s Daughter, *The Complete Short Stories of Nathaniel Hawthorne*, Hanover House, Garden City, New York, 1959, pp. 256–276.
- (2) MARTIN, Terence : “Rappaccini’s Daughter”, *Nathaniel Hawthorne*, Twayne Publishers, Inc., New York, 1965, pp. 93–98.
- (3) CREWS, Frederick C. : Giovanni’s Garden, *The Sins of the Fathers : Hawthorne’s Psychological Themes*, Oxford University Press, New York, 1966, pp. 117–135.

- (4) FOGLE, Richard Harter: "Rappaccini's Daughter", *Hawthorne's Fiction: The Light & the Dark*, University of Oklahoma Press, 1964, pp. 91-103.
- (5) THARPE, Jac: Who is Beatrice?, *Nathaniel Hawthorne: Identity and Knowledge*, Southern Illinois University Press, 1967, pp. 89-94.
- (6) Tharpe, *ibid.*, p. 92.
- (7) BOEWE, Charles: Rappaccini's Garden, *American Literature*, March, 1958, p. 39.
- (8) ROSENBERRY, Edward H.: Hawthorne's Allegory of Science: "Rappaccini's Daughter", *American Literature*, March, 1960, p. 46.
- (9) Crews, *ibid.*, p. 128.
- (10) Boewe, *ibid.*, p. 40.
- (11) Fogle, *ibid.*, p. 101.
- (12) Boewe, *ibid.*, p. 40.
- (13) Crews, *ibid.*, p. 127.
- (14) Fogle, *ibid.*, p. 99.
- (15) Boewe, *ibid.*, p. 41.
- (16) Crews, *ibid.*, p. 134.
- (17) cf. Crews, *ibid.*, pp. 124-125.
- (18) cf. Tharpe, *ibid.*, p. 91.
- (19) KLOECKNER, Alfred J.: The Flower and the Fountain, *American Literature*, November, 1966, p. 324.
- (20) Kloeckner, *ibid.*, p. 326.
- (21) DICKINSON, Emily: edited by LINSOTT, Robert, N., *Selected Poems & Letters of Emily Dickinson*, Doubleday Anchor Books, New York, 1959, p. 145.
- (22) Martin, *ibid.*, p. 97.
- (23) Tharpe, *ibid.*, p. 89.
- (24) Fogle, *ibid.*, p. 92.
- (25) Fogle, *ibid.*, p. 100.

本稿の I は 1967 年 9 月 30 日 南山大学文学部に於ける日本アメリカ文学会中部支部例会で発表したものを改作したものである。なお、発表時の題目は「Hawthorne の 'Rappaccini's Daughter' の解釈について」であった。

Summary

Rappaccini's Solitary Garden

UNOKI, Keijiro

'*Rappaccini's Daughter*' seems basically like a dramatic treatment of a catastrophe in the enigmatic Rappaccini's Garden; first on the conflict enacted in the very garden between the two approaches to love, sincerity by Beatrice and fantasy by Giovanni; secondly on the conflict enacted in the very garden between the two approaches to science, induction by Rappaccini and deduction by Baglioni. No one can really know anything about Beatrice except that she is well identified with the gorgeous but deadly purple-blossom which dominates the garden. Indeed whenever a certain kind of symbol is mentioned, it never fails to be related with the botanical imagery. Surely there must be significance in the fact that Hawthorne chooses botanical imageries — perhaps partly because of their external beauties, partly because of their capability of producing 'the lurid mixture' of hybrids. Such hybrid leads to the isolation and this isolation leads to severe, desolate love which no exceptional girl, nor ordinary youth can hardly nourish.

Our next step is about the conflict between the two famous scientists; in which Baglioni, having a pseudo-maternal love to Giovanni, cares to vanquish his rival Rappaccini, an overly protective father, than he cares for the welfare of Giovanni and Beatrice. In the final scene, just as Baglioni's antidote has failed in his shallowness to evince the powerful Rappaccini's skill, so Rappaccini's wish has failed to see that Beatrice 'would fain have been loved, not feared.' Thus again their conflict leads to the isolation which no exceptional, nor ordinary scientist can hardly nourish.

If so, 'since some industry must be, the little toil of love' and the little accumulation of scientific knowledge would be 'large enough for' us.